

矢板のお城めぐり

⑤



県道側から城跡を望む

今回は「沢村城」の紹介をしてみよう。ただ、この城は、文治三（一一一八）年に那須家の七男満隆（与一の兄）によって築かれました。ですから、那須家の城ということになります。

しかし、廃城になるまでの約四百年の内、百五十年間は塩谷家の支配下にありました。こんなことから、矢板の支城の中に組み入れさせていただきました。

なお、この満隆は、築城後に沢村氏を名乗っており、また、弟の九郎朝隆

は、ここから二キロメートルほど南の豊田（旧村名は稗田）（注1）地内に稗田城を築き、兄弟連携して、塩谷家の進出を食い止める役目を果たしていました。

さて、この城は箒川右岸の段丘を利用して造られた平山城で、南北が約四〇〇メートル、東西が約二〇〇メートルと推定されており、丸と続き、さらにはこれを補完する内堀と二の堀、三の堀が極めて良い状態で遺されています。JAしおのや沢倉庫の南東側にある湯泉神社（注2）が、この城のほぼ中間地ですので、その規模が想像つくのではないのでしょうか。

この二の丸部分に、地下霊場で有名な観音寺（注3）が建てられています。この寺は、元々土屋境の沢地内の壇上（注4）にあったものですが、永正年間（一五〇四～一五二一）に那須資房によって沢村城主の墓地と共に、現在地に移され



沢村城主歴代の墓

たと伝えられております。また、沢村氏の末孫は、那須烏山市向田地区を中心に二十数軒あり、政界や教育界で活躍されている方がおります。かつて、烏山町長を四期勤められた沢村一郎氏もそのお一人でした。（矢板市史より）

（注1）明治九年に改名。

（注2）温泉神社に同じ。那須家の崇敬が篤く、那須地方には八十社を数える。

（注3）補陀落山千手院観音寺が正式名。天長二（八二五）年開山と伝わる。

（注4）弾正と記されることもある。

記者の独り言

手書きお便りはステキ!! 「人との出会いは宝物」が私のモットー。筆不精の私が手紙を書くようになったのは、母の病氣とリハビリに励み、回復した頃だった。はがきに簡単な絵を描き、短い言葉を添えて送ることを知り、早いものでそれから十七年が経ち、母は九十歳を超えた。

母は私の手紙ファン第一号である。私自身も心の安らぎをもらい、「ありがとう」と思えることがうれしい。紙手紙は心を伝えるもの。紙に向かっている時もその人のことを想って書いている。夢中になり、集中している時間はしあわせに思う。

だって、自分も元氣をもらっているのだから。アナログもいいものだと一喜一憂しながら、不器用な自分がいる。パソコン・スマートフォンにまだ足踏み状態!! 一歩前に踏み出せない私。

それでもこれから手書きのお便りを書き続けていきたい。ハガキでおしゃべりしたい人。この指とまれ!! なんてね。（M・W）

SOS

今年の泉地区の新成人者が三十一人であつたという。この中には当然大学生も含まれているだろうから、県外に就職先を求めてしまうと、一体何人が居残ってくれるのだろうか。これは最早「過疎化が進んでいますね」というレベルではない。「限界集落」に向かつてまっしぐらと考えるべきである。

た。それが現在では、三七二八人（平成二十七年国勢調査）まで減少している。さてどうするか。手紙をこまねいている場合ではない。泉地区は宝物で溢れている。文化財が五十七もある。資料館やミュージアムが五館もある。星空がきれいだ。湧水もある。リンゴ園地もあるぞ。それにミヤコタナゴだっている。山城だつて五つもある。素材は十分そろっている。後はどう調理するかだ。さあー急ごう、時間はないぞ。（T・S）

（編集後記）

年度の切り替え時期は何かと忙しい日々ですが、健康第一で、家族を大切に、がんばりましょう。今号も矢板のいいとご盛りだくさんです。行ってみたいな! やってみたいな! そんな気持ちになって一歩を踏み出せたら、人生は楽しい。きっとね! 楽しもうやいたライフを!! (T・O)